

ナイチンゲールとバラ

恋する学生

ある庭の木の、巣の中で、ナイチンゲールは歌いました。

その歌は美しい歌でした。

ナイチンゲールは愛と幸せについて歌いました。

ある日、ナイチンゲールは庭にいる若い学生を見ました。

「彼女は、もし僕が赤いバラをあげたら僕と一緒に踊ってくれると言っている」と学生は言いました。

「でも僕の庭には赤いバラがない」

学生はこう言うと、目に涙をいっぱい浮かべました。

「僕は毎日哲学を学び、賢い者たちが幸福について語るあらゆるものを読んでいる。なのに今、僕の幸福は一輪の赤いバラにかかっているなんて！」

ナイチンゲールはこれを聞き、「ついに本当の恋人が現れたわ。毎晩、私は愛を歌い、そしてこの若者は愛に苦しんでいる」と自分に言いました。

学生は続けました。

「僕は教授の娘を愛していて、明日王子さまの宮殿で舞踏会がある。僕の愛する人はそこにいるだろう。僕が赤いバラを持っていけば、彼女は僕と踊ってくれる。僕が赤いバラを持っていなければ、彼女は僕と話してもくれないだろう」

若い学生は庭を見回しました。

そこには黄色いバラと、白いバラがありましたが、赤いバラはありませんでした。

「哀れだ」と彼は言いました。

「一輪の赤いバラが必要なのに、この庭には一つも見当たらない」

「ああ」とナイチンゲールは言いました。

「愛は素晴らしいものだよ。エメラルドやオパール、真珠よりも貴重で、市場で金貨を払って愛を買うことはできないのよ」

「楽士たちはバイオリンを弾き、僕の愛する人は彼らの音楽に合わせて踊る。でも彼女は僕とは踊らない。僕には彼女にささげる赤いバラがないんだ」

学生は草の上に倒れ込み、泣き出しました。

チョウが彼の声聞き、「どうして彼は泣いているの？」と尋ねました。

ヒナギクが友達に「どうして彼は泣いているのかしら？」と尋ねました。

「どうして彼は泣いているんだろう？」と小さな緑色のトカゲが言いました。

「赤いバラが欲しくて泣いているのよ」とナイチンゲールは言いました。

「赤いバラだって？」と、彼らは皆答えました。

「ばかげたことを！」

他の動物たちは笑いましたが、ナイチンゲールには分かっていました。

ナイチンゲールは悲しげに学生を見つめ、愛の神秘について考えました。

